ハヤテのごとく！ＳＳ『ナママナ』

らんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハヤテのごとく！ＳＳ『ナママナ』

【Ｎコード】
Ｎ１４０２Ｇ

【作者名】
らんぐり

【あらすじ】
ある朝、ハヤテの目の前には異様な光景が広がっていた。早起きして朝ごはんを作るナギ。ベッドの上でだらだらゲームに興じるマリア。これは一体どういうこと……？『ハヤテのごとく！』のドタバタパロディＳＳ。

（前書き）

『ハヤテのごとく！』のパロディＳＳです。ラブ的な要素は皆無ですが、楽しんでいただければ幸い。　※改行、改ページ修正しました。まさかあんなに携帯からアクセスがあるとは……。

その日、綾崎ハヤテの目を覚まさせたのは小鳥のか細いさえずりだった。
窓の近くの一本木に、ヒバリが巣を作ったのだ。カーテンを開けると、親鳥がパタパタと、忙しなさそうに飛び立っていくところだった。
「ん～っ！　ふぅ、今日もいい天気だなあ！」
思わずそう口に出してしまうほど、気持ちのよい目覚めだった。
カーテンを開けた向こうの空も澄み切っている。
今日は何か良いことが起きそうな、そんな予感がする朝だ。

ハヤテは顔を勢い良く洗い、すっかり着慣れた執事服を軽やかに身にまとう。
時刻は朝6時。執事の朝は早い。主の朝食を準備し、主の身支度を整え、……そしてその主に、今日も頑張って学校に行ってもらえるよう説得しなければならないのだから。
「昨日は張り切っていらっしゃったからな……今朝のお嬢様には苦労させられるかも」
セリフとは裏腹に、意気揚々と鼻歌を歌いながらハヤテは台所へと向かう。
こんなにテンションの高い朝も久しぶりだった。

炊事場からは、トントントン……と包丁の小気味良いリズムが聞こえてくる。とくにお互い起床時間を決めているわけではないが、マリアはたいていハヤテより早く起きて、先に朝食の調理を始めている。
「ラン、ランララランランラン、ラン、ランラララン♪」
ドアの前に立つと、『王蟲との交流』を口ずさんでいるのが聞こ

えてきた。
選曲はともかく、どうやらマリアもなかなかご機嫌な朝らしい。
「おはようございます！　マリアさ……」
ドアを開け放ち、元気よく挨拶をしたハヤテの目に飛び込んできたのは。

「んー？　おお、ハヤテ。おはよう。ちょうどよかった、お醤油が切れてしまったのだが、買い置きはどこにおいてあるのだ？」
……制服に着替え、エプロンをし、湯気立つ鍋の前でお玉をかかげる三千院ナギの姿だった。

「え……、えええええええええええぇぇぇぇ！！？？」

『ナママナ』

「――っ、どうしたのだ一体いきなりすっとんきょうな声を上げて！」
「す、すっとんきょうなのはお嬢様のほうですよ！　どうしたんですか！？　え、6時、今、朝の6時だよな？　こんな朝早くにお嬢様が起きて、しかも制服、うわあああちょっと、何やってるんですかーっ！」
ハヤテはナギの元に慌てて駆け寄ると、お玉を半ば強引に奪いつつ、ナギを火のかかる鍋の前から遠ざけた。
「ちょっ、な、ハヤテ！　何をするのだ！」
「何って、お嬢様が料理なんてそんな、……あれ？」
動揺するハヤテの鼻を、ふわっと湯気に混ざる麹の香りがつつく。
目の前の鍋の中には、乳褐色の味噌汁がことことと煮えている。
油揚げといちょう切りにされた大根が中でゆらゆらと踊っていた。
怪訝な顔をしながら、ハヤテは恐る恐るお玉で汁をすくい、そっ

と味見する。
「あ……」
美味しい。鰹節でとった出汁の香りが良く、味噌の加減もちょうどいい。
「まったく、なんだというのだ。そんなにお腹が空いたのか？　だったら手早く済ませるから、食卓の準備でもしていてくれ」
眉に少し皺を寄せつつ、ナギは既に茹でてざるに揚げてあったほうれん草を刻み始めた。
トントントンと、手際よく。

「あ、あわ、あわわわわ……」
有り得ない。ありえない。アリエナイ。
ナギのその、ともすれば凛々しくも見える横顔に、ハヤテはこの世ならざるものを見たかのように後ずさる。
いや、実際有り得ないのだ。
ナギがハヤテよりも早起きし、マリアもいないのに制服に着替え、あまつさえ台所に立ち自ら朝食をこしらえるなどということは。
ハヤテが口をパクパクさせている間にも、ナギはてきぱきと調味を整え、色味も美しいほうれん草のおひたしを小鉢に盛り付けた。
「さて、次は……」
「マ、マリアさあああああんっっっ！！」
目の前の信じられない現実に、ついにハヤテは台所から駆け出していた。

「お、お嬢様が、あんなご立派に……、ああ、もうっ！　本来喜ぶべきことなのに有り
得なさ過ぎて！」
すっかり混乱したハヤテは、マリアの部屋にノックもせずに飛び込んだ。
「マ、マリアさん聞いてください、お嬢様が……！」

嬉しだか悲しだかの涙で潤んだハヤテの目に飛び込んできたのは。
「ん～？　あ、ハヤテ君、おはよ～ございます。あ、またＦ○Ｅ……。初見で飛び込むのはやっぱり危険ですかね？　それとも危険を省みず踏み込んでこそ真の冒険者でしょうか？　う～ん……」

ごっそり布団に身を包み、顔と手だけをひょっこり覗かせながらニン○ンドー○Ｓに興じるマリアの姿だった。

「何ぁにやってんですかマリアさーーんっ！！」
部屋に飛び込んだ勢いそのままにハヤテはマリアの布団を引っぺがす。
「きゃっ、も～、ちょっと、よっ、何するんですかハヤテくん……。あ、ガードしたのに最大ＨＰのダブルスコア持っていかれましたよ、やっぱりここは避けるべきでしたねぇ、リセット、と……」
奪われた布団を速攻で取り返して潜りなおすマリア。
あまりの自堕落ぶりに、一瞬見えたネグリジェの色気も一瞬にして冷めてしまった。
「ま、マリアさん、そんなことより大変なんですよ！　お嬢様がこんな時間に早起きして、あろうことか朝食までお作りに……！」
「いいことじゃないですか、じゃあ今日は私何もしなくていいですね……、街に戻ったらセーブして二度寝しましょうか……」
「は、はぁ？」
呆気に取られるハヤテをよそに、マリアはもうすっかり目の前の２つのディスプレイにご執心だった。
「ま、マリアさん……。え、えっと、せ、洗濯物とか溜まってるんですけど……」
「あー、そうですね……。よっぽど気が向いたら……干したり干さなかったり……」
気のない返事。動かない視線。

昨晩まで非の打ち所のない万能メイドのはずだったマリアは、一晩にして絵に描いたようなダメ人間に堕ちてしまっていた。

（いや待て、何気ない現実のすぐ隣にはいつも奇妙な世界が顔を覗かせているとタ〇リも言っていたように……、これはまたいつも通り妙なことに巻き込まれていると見た……！）

「いやー、また何か面白いことになっとるみたいやな」

「お、おわっ、咲夜さんいつの間に！　ていうか、まだ朝の６時過ぎですよ！？」

「ウチのネタレーダーは２４時間広範囲をカバーしとんねん。全国津々浦々、おもろいことがあったらどこでも駆けつけるでー」

学校の制服に身を包んだ咲夜は、親指をビッと立てて白い歯を見せて笑う。

「そんなことより、これはどうしたことなんやろなあ、これじゃまるで……」

「ええ、自堕落腐敗ニート万歳のナギお嬢様が、いきなり品行方正優良児童になり、完璧赤マルメイドさんのマリアさんが、一人暮らしで自由の味を占めた大学生のようにナマケモノに……」

「ナギがマリアでマリアがナギで、といったところか……。そこらへん、どうなんや伊澄さん？」

「え～……、あふ、ナギと……、マリアさん……の、波が、交じり合って……、ふああ」

細々とした声が聞こえたかと思うと、咲夜のすぐ横で壁にもたれかかるようにして伊澄が立っていた。

「い、伊澄さんまで。……だいぶお眠のご様子ですが」

「ええ、咲夜に、無理矢理起こされて……。ハヤテ様は早起きなのですね……」

「伊澄さん、それは僕じゃなくてコ〇ン像です。それより、波が交じり合ってるって？」

質問するハヤテに、何とか意識を保とうと顔をぺちぺち叩きなが

ら伊澄が答える。
「そうですね……、簡単に説明すると、２人の魂が何らかの原因で中途半端に混ざり合ってしまっている状態なんです。これが完全に入れ替わると、見た目がナギで中身がマリアさん、という現象が起こったりするんですが……」
「漫画とかやとよく有るシチュエーションやな。まあ今回はそうやのうて、ざっくり言ってしまえば、キャラだけ入れ替わってしもうとるっていうこっちゃな」
「いくらユル系コメディ漫画のパロＳＳだからって、そんなご都合主義的なことがいきなり起こるだなんて……」
「それが、２人の魂の状態がなぜか非常に不安定なんです。つい最近、何か２人が大きなショックを受けるようなことはありませんでしたか……？」
伊澄に尋ねられ、ハヤテはしばらく考え込む。
「ショック……。……！　そう言えば――！」
「「そう言えば……？」」

「――昨晩は、お嬢様の手料理フルコースだったんですよ……」
「……まさに、魂の震える料理やったっちゅうこっちゃな……」

◇　◇　◇

「む？　なんで伊澄と咲夜が来ているのだ？　まったく、来るなら来ると言ってくれないと、またアジを焼かないといけないじゃないか……」
食卓に料理を並べるナギは、眉をへの字に下げる。
「いえ、お構いなくナギ。ここに出ているだけで十分だから……」
「これ、ほんまに全部ナギが作ったんかいな……」
食卓の上には、煮物、きんぴら、サラダ、浅漬けと、地味ながら栄養と味のバランスに抜かりのないメニューが並んでいた。

「む、マリアはまだ起きてこないのか。まったく、いつまで経ってもネボスケで困る」
「今のセリフ、マリアさんに聞かせたらショックで元に戻るんやないか？」

「よし、みんな席に着け。はい、いただきます！」
「いただきます……」
「いただきます、って、なんやナギに仕切られると調子狂うなぁ……」
「まあまあ咲夜さん、ほら、おいしそうですよ」
「言うても、ナギの料理やからなあ、油断は……」
訝しげに咲夜は、まず煮物に箸を延ばし、ひょいと口に運ぶ。
「……美味いやんけ」
「うん、とってもおいしいわ、ナギ」
「ふふーん、しっかり味わって食べるのだぞ。おかわりもあるからな」
「これをナギがなぁ、ほんま妙なことも起こるもんや……、……何泣いとんねん」
咲夜の隣では、ハヤテがぼろぼろと涙を流しながら味噌汁をすすっていた。
「ずず……、くっ、いえ……、このような事態とはいえ、お嬢様のお作りになった料理で、みなさんにこんなに喜んでいただけるなんて、執事冥利に尽きます……、ぐすっ、うおおおおぉぉぉっっ！！」
涙を撒き散らしながら、ハヤテはものすごい勢いでご飯をかっ込む。
「お嬢様、おかわりです！　今日の僕の胃袋は小宇宙に繋がっています！」
「うむ！」
「いや、じぶん執事やろ……」
あまりの感激にすっかり自分の仕事も忘れて主人にご飯をついで

もらうハヤテ。

「むぐ、むぁあ確かに、んぐ、ナヒはこのままでもええんひゃうかな、んむ、誰が困るわけでもなひ、あつつ」

ぴたりとナギは箸を止め、箸置きにすっと置くと、咲夜を睨み据えて低いトーンで口を開いた。

「……サク」

「んぅ？」

「食事中におしゃべりするなとは言わん、しかし口に物を入れたまま喋るというのは、仮にもお嬢様と呼ばれる立場の人間としてどうなのだ？　親しき仲にも礼儀あり、最低限のマナーは守らないといかん」

「あ……、あはは、なんや厳しいなぁ、さすがナギＶｅｒ２．０は違」

「それに、その納豆。まさかやっぱり食べない気か？　臭いが苦手というのはわかるがな、納豆は優れた発酵食品であり、普通の食物からは得にくい栄養素が摂取できるのだから食べたほうがよい。それに、食べる前に何百回もかき混ぜることによって風味も良くなるとあ○あ○でも――」

「……ハヤテぇ」

「はい……」

「ウチ、こんなオヤジくさいナギ嫌や……」

なおもクドクドと説教を続けるナギを前に、咲夜は少し涙目だった。

「はは……、ま、まあ頼もしいじゃないですか」

「それにな、じぶん、多分忘れてるフリしとるんやと思うけど」

「はい？」

その時、ハヤテたちの背後のドアがぎぃと重々しく開いた。

のそのそとだらしなく現れたのは、寝ぐせのついた髪と寝巻きを

そのままにしたマリアの姿だった。
「ま、マリアさん……」
「ふあ～ぁ、……あら、みなさんお揃いで、おはようごふぁいま、ふぁ～……ふぅ」
まだ眠気が治まらないのか、何回もあくびを繰り返してやっと席に着く。
その腑抜けっぷりたるや、普段の毅然とした彼女を知るものなら一見しただけで愕然としてしまうだろう。というより、すでにしている。
「あ、あああ、あの、マリアさ」
「めずらしく早いじゃないかマリア。朝ごはんはどうするのだ？」
「んー……、この後また3度寝しますから……、ヨーグルトだけで結構です……」
「まったく、朝くらいはちゃんと食べなきゃダメだぞ」
机に突っ伏すマリアの頭をペシッと叩きながら、それでもヨーグルトを取りに台所に向かうナギ。
「……この有様を見てもこのままの状況でええと？」
「は……、はは……、ま、マリアさんも、たまには、羽を伸ばしても……」
釣りあがった口がヒクヒクと痙攣している。
「それにな、ウチもっと恐ろしいことに気づいたんやけど」
「な、なんですか？」
「ナギはな、まあ引きこもりや不登校や言うても、いち白皇の生徒であり、本分は立派な『学生』や」
「はあ」
「しかしや。マリアさんはもう立派に自立した一人の女性や。それがメイドもやらんと、ただこの屋敷におるだけの人間になってみ？
それは完全無欠、ほんまにただの……」
（（ニート……！！））

「あー……、なんだか息がするのもめんどくさいですわねぇ……」
ショックで呆然とするハヤテの横で、濁った魚のような目をしてマリアが呟く。
「聖母の名を冠した女が、そこまで堕ちてええもんなんやろか……」
「だあああぁぁぁっ！！　やっぱり駄目だ！　お嬢様とマリアさんには、元のお二人に戻っていただかないと！」
「ふぅ……、ごちそうさま。――その言葉が聞きたかったのです、ハヤテ様」
口をナプキンできゅっと拭うと、きりっとした表情に切り変わって伊澄が言い放つ。
「伊澄さん、ほんまマイペースな」
「このままでは魂が入れ違いになったまま固定されてしまって、非常に危険です。私も今日は学校をお休みして、なんとか解決を図りたいと思います」
「ウチも今日は欠席するわ。こんなおもろそうなこと見逃せんしな～」
「みなさん……、ありがとうございます、約一名の動機がとても不純ですがありがとうございます……」
ハヤテはよよよと嬉し泣きする。

「さて、となるとまずは……」
「何を騒いでいるのだー？　さっさと食べないと学校に遅刻するぞー？」
マリアにヨーグルトを渡しながら、ナギが言う。
「しまった、いつもの調子ならナギに学校を休ませることなど赤ちゃんのおててにちゅーするくらい簡単なことやったが……」
「今日のお嬢様は……、違う！」
席に着いて、自分も悠然とヨーグルトを頬張るナギを見て、ハヤテたちは息を呑む。

そんなことはどこ吹く風で食事を終えたナギは、
「よし、じゃあ支度するか」
「ま、待ってくださいお嬢様ー！」
部屋を出て行こうとするナギの腕をとっさにハヤテは掴む。
「な、い、いきなりどうしたのだハヤテ……。みんなが見ているというのに……」
「頬を赤らめている場合ではありません。お嬢様、お願いがあります」
「な、なんだ？」
ハヤテはすぅっと息を吸うと、
「学校に……、行かないでください」
「……あぁ？」

下唇を突き出し、何言ってんだうちの執事は脳が沸いたかという気持ちを顔面いっぱいに表すナギ。もっともだ。至極もっともだ。
「なんだそれは、何か理由があるのか？」
お嬢様とマリアさんのキャラが入れ替わってるからなんですよー、などと言ったら余計に話がこじれるに違いないので言えない。だからそもそも、こんな直球に話を仕掛けること自体が間違っているのだが。
「ほんま、説得とか説明とかとことん下手な人間やな借金執事……」
「でぇ、ですからあのですね」
「理由はないんだな、じゃあ行く」
振り切ろうとするナギに追いすがるように、再びハヤテは腕を取り、引き止める。
「ちょ、待ってください！　とにかく、今日のお嬢様は学校に行っちゃいけないんです！」
「何を言っておるのだ！　学生が学校に行くなど　当　然　の　こ　と　で　は　な　い　か　！」

「うわあああああぁぁん！！？」
「ちょ、ハヤテ！　ナギから真人間のセリフが聞けたからゆうて感涙してる場合やないて！」
引き止める２人（残る２人は食卓でまどろみ中）とナギの膠着状態が解けたのは、それから３０分後のことだった。

◇　◇　◇

「……で？　ここまでして私を引き止めて何をさせようというのだ？」
書斎の椅子に足を組んで腰かけるナギは、漫画的な青筋マーク全開、言葉の端々に怒気がこもって顔の半面がピックピクしていた。
「えーと……」
「どうするんでしたっけ？」
青筋が破裂した。
「そうか、ハヤテは知らない間にとってもユカイな人間に育っていたようだな……、お嬢様はうれしいぞ……」
「ちょっ、すいませんお嬢様！　いつの間にか手にしているその物々しいグラーフ○イゼンはしまってください！」
「でも実際どうするんや、伊澄さん？　それぞれ自転車に乗せて正面衝突でもさせるか？」
「そのネタ何人に通じるんでしょうね……。あれ入れ変わるの外見ですし」
「？　何の話かわかりませんが、そういった外的ショックで戻すのはやはり危険なのです。運がよければ元に戻りますが、最悪完全に入れ替わってしまうかも……」
「ギャンブルやな。じゃあどうするんや？」
「幸い、２人の人格はまだ残っています。お互いに、本来の自分を思い出させるような体験を起こせば、こう、しゅるっと」
「巻尺みたいやな、魂……」

「元のお嬢様を思い出させる、ですか……。よし、やってみましょう！」
ハヤテはぐっとガッツポーズ。
「おーい……、全然話が見えないのだが」

「作戦その１。テレビゲーム！」
まず最初に足を運んだのは遊戯室。
「なんや、ただゲームするだけか？　確かにナギがいつもやっとることやけど……」
「ふふふ……、ちがいますよ咲夜さん。今から僕は、対戦ゲームでお嬢様をぼっこぼこにしてやん……、します！」
「な、なんやてー」
「気のない返事をありがとうございます。その結果お嬢様はどうなるか？　負けず嫌いのお嬢様です、『ハヤテのバカー！』　ピシャーン！　……これですよ」
「これですよ言われてもなあ。だいたい、じぶんゲームでナギに勝てるんか？」
「不思議と負け知らずでして……、さっきのも実体験です」
「……ごくろうさん」

「よし、行きますよーお嬢様！」
「まったく、何故学校を休んでまでこんなこと……」
不満を垂れつつも、いざ試合開始となると、ナギの眼光はゲーマーのそれに変わる。
画面では、マ〇オとス〇ークが戦いの火蓋を切っていた。
「ま、お手並み拝見やな」
「どきどき」

３０分後。

「ゼェ……ゼェ……はぁ……はぁ……」
「どうしたハヤテ、そんなものか？」
「馬鹿な、この僕が、こんなに消耗させられるなんて……！」
結果。２０勝０敗。ナギの。
「……駄目やん」
「ハヤテ様、あまり気を落とさないで……」
「そんな、僕は、このゲームで手加減以外でお嬢様に負けたことなんてないのに……！」
「おそらく、ナギもゲームの腕自体はそれほど悪くないのです。ただ、熱くなると冷静さを欠いてしまって……」
「今はマリアさんのあの冷酷、もといクールさがあるから真の実力を出せるっちゅーことか」
「そんな……」
ハヤテはがくりと肩を落とす。
「何してるんですか、あ、もう、私抜きでみんなで楽しんでー」
「うわ、ちょっ、マリアさん！？」
いきなり部屋に飛び込んできたマリアは、部屋に飛び込みハヤテの横に陣取る。
どこに行っていたのかと思ったら、いつの間にかメイド服に着替えている。
しかし、エプロンはくしゃくしゃ、襟元は乱れて、いつもの毅然とした雰囲気はカケラも感じさせない。寝ぐせも満足に取れていなかった。
「ま、マリアさん、その、ち、近いですよ……」
「えー、嫌なんですか？」
「い、いえ、決して、そのようなことは」
「じゃあ大丈夫ですわね♪　さ、負けませんよー」
マリアはノリノリでメタ○イトを操る。天真爛漫な、子供のような笑顔で。
「鼻の下伸びとるでーハヤテ。……しかし、どうしたんやマリアさ

ん」
「ほら、ナギもさびしんぼうだから……」
「それも伝染ったっちゅーわけか。しかし……」
「あー、負けちゃいました。もう、ハヤテくんのばかっ」
「え、ええっ、いや、すいません。あはは……」
「……人格が違うだけで、随分と威力が違うもんやな」
「……ぶすっ」
（お？）
「さ、作戦その2！　真っ暗闇！」
パチン！
「おわっ、な、何も見えへん！」
「お嬢様は暗闇を怖がりますからね、これで」
「は、ハヤテくぅ～～ん！！」
「おわっ、ま、マリアさん！？」
この暗闇でどう位置を悟ったのか、マリアはがばちょとハヤテに抱きつく。
鼻をすすり、（見えないが）3秒ですでに涙目だった。
「ですから、ナギの好きなものも嫌いなものもすでに入れ替わっていますので……」
「……ていうか、わざとやろ借金執事」
「そ、そんなことありませ、えへへ、うわ、ちょっとマリアさん、当たってますってば」
「……むむむ……」
（あらあら？）
「こほん、作戦その3。……え～と」
「なんや、もうネタ切れかいな」

「と言われましても……、むぅ」
「やっぱコイツで1回パシコーンッとしばいてみるっちゅーんは」
「咲夜さんそのハリセン鉄製ですから凶器ですからそんなもんで叩いたら魂まるごと彼方に飛んでっちゃいますから！」
3人して頭を抱え込む。もともと目標からして曖昧なのだから、具体的な解決方法など思いつくべくもない。
しばらくの沈黙の後。
「ハヤテくーん……」
「へ？　あ、マリアさん、どうしました？」
いつの間にかハヤテの後ろに立っていたマリアは、ぶすっとした顔でハヤテの袖を引っ張っている。
「みんな何やってるのかわかんなくてつまんないです。それよりもっと一緒にゲームしましょうよー」
甘えた声を出しながら、マリアはぐいぐいと腕を引っ張ってくる。
「むー……！」
背後で怒りゲージが急上昇の人物にハヤテは気づかない。
「ちょっと、マリアさん、今大事な話をしているんですから……！」
けんもほろろに突っぱねられたマリアは、
「ハヤテ君……」
「……なんですか？」
眉を不機嫌そうに下げて、顎を引いてやや上目遣いに、
「私の言うこと、聞いてくれないんですか……？」
「ぐはっっっ！！」
「こ、これはいつも通りのわがままナギのセリフ……、しかし年上兼現在ダメ女属性のマリアさんが用いることによって、ナギとはまた異なる方向性の破壊力を発揮しとる！」
「咲夜、誰に説明しているの？」
発光しそうなほど上気した顔と呆けた表情でしばらく固まってい

たハヤテは、
「い、行きましょうか……」
「そしてハヤテが負けた！」
マリアに腕を引かれ、ハヤテはだらけた足取りで屋敷へと向かう。
と、その眼前に立ちはだかったのは。
「ハ～～ヤ～～テ～～の～～……、」
「お、お嬢様？　あれ、なんだかその身に纏った紅く禍々しいオーラには見覚えがアリマスヨ？」
「バッッ……、カアアーーーッッ！！！！」
顕現させたバットを一閃、ハヤテは空中で2回ホップして遥か彼方へと飛んで行った。
「まったく、ハヤテはほんとにまったく！」
「……あら、私いったい何を、……って、あれ、やん！　私ったらなんてふしだらな格好で……！」
こちらも元に戻ったらしいマリアは、大慌てで屋敷へと戻っていった。
「うーん、これも愛の力、っちゅーことなんやろか？」
「さあ♪」

次の日。
「お嬢様～、ナギお嬢様～？」
「むー、ハヤテ……、あと5時間……」
「単位をもうワンランク下げてもらえますか、ほら学校に行きましょう！」
今日も今日とて、三千院家の主はベッドに張り付いたように動こうとする気配がない。

マリアは既に朝食の準備を進めているし、いつも通りの三千院邸の朝だった。

「もう、うるさいな～。だいたい、私が学校に行かなければいけないなどとどこの誰が決めたのだ、何時何分何秒？」
「まあ時間まではわかりませんが、どこの誰かくらいは……」
「あ？　何を言って……」
『何を言っておるのだ！　学生が学校に行くなど　当　然　の　こ　と　で　は　な　い　か　！』
「ぶふっ！？」
ＩＣレコーダを握り、不敵に笑うハヤテ。
「お嬢様、ご自分の言われたことには責任を持ちませんと、ね」
「ば、馬鹿な、寝言か何かに決まってる！　自他共に認め誇る生粋ニートの私がそんなこと、うわあああ！？」
「はいはい、さあ行きましょう行きましょう☆」
「何かの間違いだあぁぁっ！」

「ほんま、ぶっ飛ばされてもタダでは起きん執事やな……」
「ですね、……くー」

―ＥＮＤ―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1402g/

ハヤテのごとく！ＳＳ『ナママナ』

2010年10月8日10時31分発行